国立アイヌ民族博物館の教育普及ツール開発Ⅰ：
着物のぬりえワークシート

Development of the Educational Tools of National Ainu Museum Vol. I:
A Worksheet of Colouring and Learning the Ainu Garments (coat) and Ainu Patterns

笹木一義（SASAKI Kazuyoshi）
国立アイヌ民族博物館 研究主査（Senior Fellow, National Ainu Museum）

要旨

国立アイヌ民族博物館の開館前後にかけて、基本展示「探究展示 テンパテンパ」の開発と並行して、館内外で使用する教育普及のためのツールの開発を行った。ここでは、着物のぬりえワークシートを実例として、アイヌ民族の歴史と文化に対する教育普及のツールとしての留意点、ワークシートのねらいと体験内容の検討過程、開発時の課題、開館前後に館内外で行った試行と評価のプロセスについて述べる。

キーワード：博物館教育、ワークシート、ツール開発、展示評価、プログラム評価、ぬりえ、展示連携、着物

Abstract

Before and after the opening of the National Ainu Museum in 2020, the Education Team of the museum, including the author who is a member, developed an educational tool that could be used inside and outside of the museum, and a permanent educational exhibition titled 'Interactive Station "*tempatempa*" '.

As part of these efforts, this article analyzes the process involved in the development of an educational worksheet that through colouring in people can learn about Ainu garments and Ainu patterns. Through examining the development of this worksheet as a case study, the paper illustrates the process of creation, the consideration of sensitive issues, and the establishment of learning goals when developing educational tools and programs about the history and culture of the Ainu. It will conclude with the result of a formative evaluation of this worksheet, which was held both inside and outside of our museum.

Key Words：Museum Education, Worksheets, Development of Educational Tools, Evaluation of Exhibitions, Evaluation of Educational Programs, Colouring, Relationship Between Educational Tools and Exhibitions, Garments

1. はじめに

博物館にて、館側がその館の活動を行う際に使う媒体として、常設展示、特別展示などの「展示」があるが、博物館での教育普及活動を行う際に、利用者と展示、エデュケーター・研究員・学芸員などの館のスタッフ、そして館のメッセージをつなぐ役割の媒体として、教育普及活動で用いる「ツール」が挙げられる。また、それらの教育普及ツールは、館内のみの使用だけではなく、退館後に家に持ち帰られること、また館外で行うアウトリーチ活動で使用されることなどもあり、物理的・時間軸的な「館内」での「滞在時間」を越えたところでも利用されるものである。

2020年に開館したばかりの国立アイヌ民族博物館（以下、「当館」）の、今後の教育普及活動の展開にお

いていくつも開発されていくであろう教育普及ツールについて、その開発と試行のプロセス、そして展示や教育普及活動にどのようにツールが関わり、利用者と館をつないでいくか、という視点で論が蓄積されていくことが必要と考える。本稿ではその嚆矢として、開館前後にかけて開発されたぬりえのワークシートを取り上げ、アイヌ民族の歴史と文化に対する教育普及のツールとしての留意点、ワークシートのねらいと体験内容の検討過程、開発時の課題にふれるとともに、開館前後に館内外で行った試行と評価のプロセスについても述べる。

2. 背景と目的

2.1. 博物館におけるワークシートと、当館の状況

博物館におけるワークシートは、展示情報を構成する要素としてのハード面・ソフト面[1]の「ソフト面」のひとつとしてとらえられ（齊藤 2019: 254-255）、展示解説ツールのひとつとして、解説シート、セルフガイド、ワークシートなどに分類されたり、呼称されたりするツールである（佐藤 2019: 394-395）。博物館の体験は、展示、プログラム、パンフレット、売店、案内図、など様々な要素全体が一体となってはじめて質が高められるものと考えられており（Falk and Dierking 1996: 149-153）、ワークシートもその一翼を担うものと考える必要がある。

ワークシートは国内外の様々な館で実践されており、事例の蓄積も多い。「学校で使えるミュージアム一覧」として全国の館の一覧とともに、「書き込み可能なワークシート」があるか／「無料の配布物」があるか、など、ワークシートの所在有無が一覧化されるほど、多種多様な事例がある（公益財団法人日本博物館協会 2013: 106-145）。利用者の対象も、一般来館者、学校団体、館外での利用など、様々な幅を持ち、多様な利用者への対応にメリットがあるものと位置づけられている（木下 2009: 128-129）。

実践事例の蓄積は多く、自然史系博物館、美術館には展示内容と合わせた事例が多いが、人文系博物館では種類、数が少ないと考えられる。しかし方法論として、どの館種にも摘要できる「概論」[2]の部分とともに、館や展示の持つ特性、そして館の利用者の動向や特性に合わせたワークシート開発が必要となる「カスタマイズ開発」の要素の両方が必要なものでもあり、ワークシート開発の方法論や理論については国内では未だ十分に議論されていないとも言える[3]。

博物館内、展示室内で用いるワークシートなどの教育普及ツールを開発する際には、ワークシートを通じて行う体験と行動が、館のミッション、展示の目的とどのように関連しており、どのようなメッセージを伝える体験となるかが重要であり、その要素が詰められていないワークシートは、ただ移動するだけのスタンプラリー以上の博物館教育の効果を望むことはできない。木下と横山（木下・横山 2012: 87）は、ワークシート利用の学習効果は、資料についての知識を一つ増やすということだけでなく、資料の見方とそのおもしろさを知り、ミュージアムの楽しみ方を知ることにある、と指摘しており、そのような機能を達成するための検証も必要となる。

次に、当館の状況と背景についてふれる。当館が持つミッションである[4]、「新たなアイヌ文化の創造及び発展に寄与する」ためには、受動的な展示観覧だけでなく、来館者が自発的・自律的に展示体験を行い、スタッフとの対話を誘発するなどの仕組みを設けていく必要がある。また、当館の基本展示室は自由動線の設計となっており、展示フロア全体の領域把握を助ける仕掛けを行いつつ、展示資料同士、別テーマ同士をつないでいきながらメッセージ伝達を行わなければならない場面もある。そのため、当館基本展示室の教育普及ツールとしては、俯瞰型とトピック型の双方からのアプローチが求められると考えられる。

また、コロナ禍の影響で、タッチパネル映像の停止[5]、モニタ上のインタラクティブコンテンツの停止、一部展示物の接触運用中止など、稼働できる展示コンテンツ量が減っている状態のなかで、展示の体験とねらいの伝達、館のミッションの伝達のために本来の機能を発揮できていない部分が出てきていた。今後のコロナ禍の動きにもよってくるが、運用制限下と平時の両方に対応する、来館者のセルフガイドによる博物館体験のアクティビティとしてもワークシートが求められている。

2.2. ぬりえワークシート開発の背景と目的

当館で基本展示に連携した教育普及ツールを開発する場合、ツール全体として目指す目的は、1) アイヌ文化に親しみを持つこと、2) アイヌ文化につ

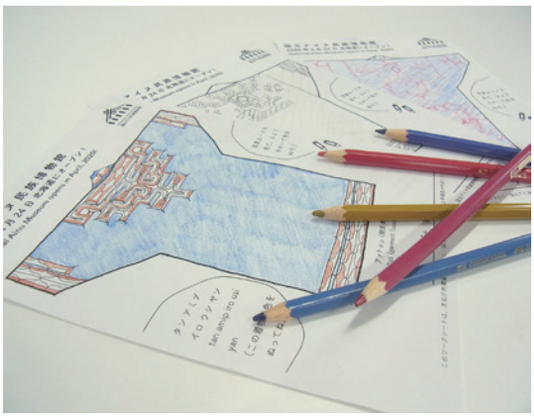


写真1　着物のぬりえワークシート(2020年1月22日 筆者撮影)

いてなんらかの理解を得て持ち帰ること (take home message)、3) 自文化への自覚、4) 多文化共生への意識を持つこと、であり、これらの点を伝えるため、博物館体験を通じて支援することが挙げられるであろう。ツールによっては、ひとつの教育普及ツールでこれらの要件を全て満たすことが難しい場合があるが、大きな目的としてはこれらを念頭に置いて開発する必要がある。

開館前である博物館準備室時代の2019年から開発を行った、着物のぬりえワークシート（【写真1】、以下、「ぬりえワークシート」）は、まだ館の建物がない状況から開館後に向けて使用できるワークシート、という特殊事例ではあるが、開館後、そして館外での働きも念頭に置いたうえでのツール開発の事例として取り上げる。

当館の基本展示室には、体験型の教育展示「探究展示 テンパテンパ」（以下、「探究展示」）がある。この展示は、18の体験ユニットとワークショップスペースから構成され、多様なアイヌ文化の要素を取り上げつつ、周囲の展示の実物資料と体験ユニットを行き来しながら、アイヌ文化への理解を深めることを目的とした展示である（笹木 2021: 110-116; 国立アイヌ民族博物館設立準備室 2020:17)。その開発の詳細については別稿を持ちたいが、ぬりえワークシートは探究展示の構成群のツールのひとつとして、探究展示、そして基本展示室の6つのテーマとの連携も念頭において開発されたものである。

基本展示ならびに探究展示の試行・開発を続けていた2019年初夏に、毎年夏休みに東京の霞が関の各府省庁で行われる「こども霞が関見学デー」（以下、「見学デー2019」）が開催されることとなった。新しく開設される国立博物館の周知が出展の主目的ではあったが、探究展示の試作中のユニットを、展示評価（開発段階評価）として実際に来館者の子どもと大人に体験してもらい試行ができる重要な機会ととらえ、出展と展示評価を行った（SASAKI, OKUYAMA, OSHINO, SATO 2019)。その出展の際に、開館後に展示室内で靴を脱いで座って体験するワークのためのエリアである、探究展示のt.3エリア（【写真2】）で行うアクティビティのひとつとして、ワークシートの開発も併せて行い、試行を見学デー2019で行うこととした。

見学デー2019における、このぬりえワークシートの主な役割としては、持ち帰り可能なツールとして、当時の開館予定日である「2020年4月開館[6]」のPRであったが、開館後の使用を見据えて、後述する目的と機能の設計を行った。

2.3.　ぬりえワークシートの目的

ぬりえワークシートは、A5判モノクロ片面のワークシートで、4種類を用意しており、開館以降、基本

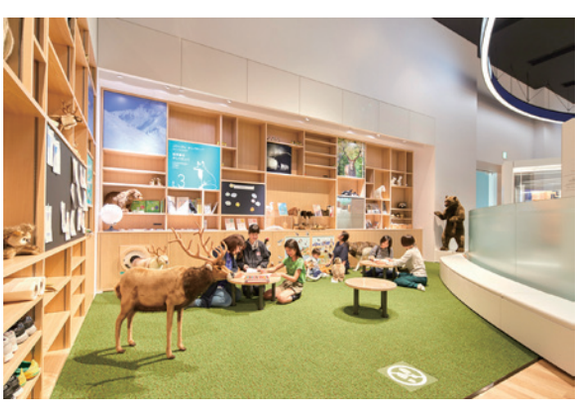


写真2 「探究展示 テンパテンパ」t.3エリア（2020年7月3日 国立アイヌ民族博物館撮影）

展示室内「探究展示 テンパテンパ」t.3 エリア前に設置、配布している（【図 1】、3.2.6 の【写真 6】）。

［シート A-1］着物の背の面で、文様・模様・紋様が入ったもの（柄あり）、【図 1】の左上
［シート A-2］着物の前の面で、文様・模様・紋様が入ったもの（柄あり）、【図 1】の右上
［シート B-1］着物の背の面で、柄のない無地のもの、【図 1】の左下
［シート B-2］着物の前の面で、柄のない無地のもの、【図 1】の右下

先述のとおり、主目的のひとつは新博物館開館の PR であり、そのための持ち帰り媒体と位置づけ、体験ならびに配布を行った。教育ツールとしての主目的は、当然ぬりえの体験を通じてアイヌ文化への興味関心を深化させることを意図しており、下記のパターンを想定してねらいの設定を行い、設計を開始した。

1) 文様・模様・紋様（以下、「文様」）をなぞって着色することで、文様の作り方、文様の細かさを体験する。［→ シート A-1, A-2］
2) 見本や文献等を見ながら文様をなぞって着色することで、文様の一筆書きの作成方法を体験する。［→ シート A-1, A-2］
3) 手を動かして簡易に疑似体験することで、文様を作るときの細かさ、繊細さ、「大変さ」を実感する。［→ シート A-1, A-2］
4) 無地の着物の型枠のなかに、自分自身で文様を描いてみることで、無地の状態から文様のデザインを構成することの難しさを実感する。［→ シート B-1, B-2］
5) ぬりえを行う際に、見本や参考文献等を参照することで、着物の素材、かたち、文様などに、様々なバリエーションがあることに気づく。また、ぬりえをぬるために参考資料をじっくりと観るようになる。［→ 全シート共通］
6) 手を動かして簡易に疑似体験することで、周囲のテーマ展示やプラザ展示にある実物資料の着物を見るときに、着物自体と文様の美しさやデザインに関心を持つだけでなく、それらを作るときの「大変さ」に思いを寄せられるようにする。［→ 全シート共通］
7) 他の人と完成したぬりえ作品をシェアすることで、着物についてどの部分に興味関心があるかを、他者と共有する。［→ 全シート共通］

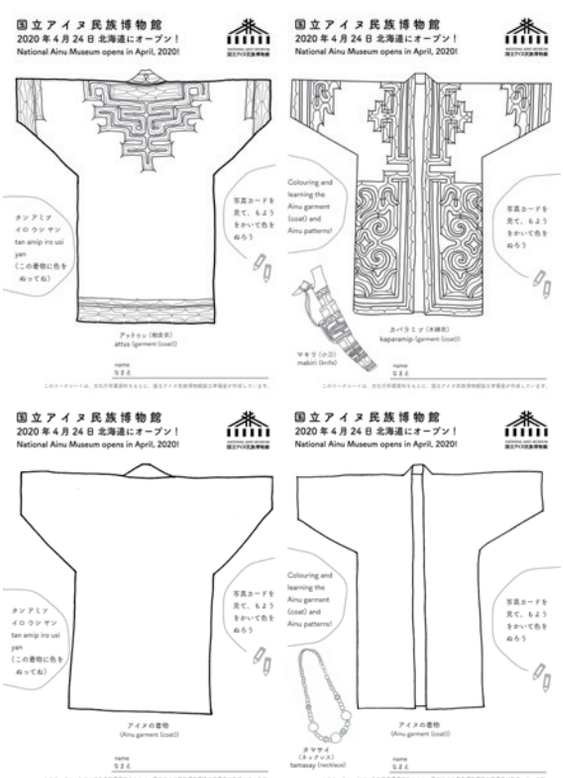


図 1　ぬりえワークシート配布形態 4 種［開館前版］
（開館後版は 3.2.4 の図 3 に示す）

2.4.　探究展示ユニットとの関連

上記目的を達成するために、どのようにワークシートの設計を行ったか、について述べる前に、このワークシートが関連する探究展示のユニット 2 件について概要を述べる（SASAKI, OKUYAMA, OSHINO, SATO 2021）。ぬりえワークシートの企画が出る以前から、探究展示については設計と開発が進められており、探究展示の設計とリサーチがあったうえで、ぬりえワークシートの開発やアクティビティが構成されているためである。

見学デー 2019 の試行の際には、探究展示ユニットの試作モックアップ 4 種を持参して検証した。その中には下記 2 ユニットのモックアップも含まれており、モックアップを用いて、展示ユニットとワークシートを連携させる解説についても試行した。ぬりえワークシートと下記ユニットとの連携点については、後述する。

2.4.1　ユニット 3［テケカラペ：シッキ 手しごと：文様 *tekekarpe: sirki* Handicrafts: Patterns］

「手しごと：文様」のユニットは、解説グラフィックと、6種類の文様の体験アイテムが設置されたユニットである。解説グラフィックでは「この模様、どうやってつくる？」という投げかけがなされ、彫り、刺繍、編み、の3種類の素材でユニットに固定された完成品に近いものと、それらの制作過程・技法を間近で手に取って体感できる手持ちアイテム3種から構成される（【写真3】）。

ユニットのねらいとしては、文様の技法を複数提示すること、各アイテムをじっくり観ながら各々の文様の作り方を推察すること、観察を通じてつくりの繊細さを感じること、文様の制作には人の手がかかっていることを伝えること、を設定した。

刺繍の制作段階を5段階のめくりで伝えるようにした制作過程資料（6.1. の写真11）や、ガマと染色した木綿を編み込んでいく、ござの制作過程資料は、どちらも技術伝承をしている博物館の学芸員が制作したものである。

写真3　探究展示ユニット「テケカㇲペ：シㇼキ 手しごと：文様」（2020年10月12日 筆者撮影）

写真4　探究展示ユニット「アミㇷ゚ 着物」（2021年1月10日 筆者撮影）

2.4.2　ユニット4

［アミㇷ゚ 着物 *amip* Garments］

「着物」のユニットは、3種類の特注のミニ衣装実物3種と、着せ替え人形と対で構成される、遮光ツイルへの印刷による着せ替え衣装10種、そして見本となる博物館資料の着物の写真のカードパウチがある。解説グラフィックでは「着物にふれてみよう」「衣服のかたち、素材、刺繍をじっくり見てみよう」という投げかけとともに、普段着のアイヌ民族の女性の写真が示される（【写真4】）。

こちらのユニットのねらいとしては、ミニ衣装実物の繊細さ・質感を感じる、衣服の多様性を知る、普段着と晴れ着の違い、「毎日文様入りの着物を着ている」というステレオタイプの補正、樹皮（靱皮）からアットゥシ（樹皮衣）の布がどう作られるかを知る、を設定した。ミニ衣装実物は二風谷民芸組合のかたがたに依頼して制作していただいたカスタム複製品であるが、約5分の1のサイズのなかに、実物の着物と同じ素材、同じ製法、そして小さいサイズでは再現困難な刺繍の文様が細密に再現されており、またその刺繍文様やミニ衣装実物の素材をさわることができる。

3.　ぬりえワークシートの設計

3.1.　ワークシート設計時のポイント、留意点

教育普及ツールとしてのワークシートを開発する際は、物理的なツールの開発、ではなく、ワークシート体験者の行為を含めたデザイン、アクティビティとしてのデザインが求められる。佐藤（佐藤 2019: 394-395）は、解説ツールを開発する際のポイントとして、利用者に何を伝えたいのか、展示にどのような情報を付加したいのか、それにはどのような道具が適しているのかを整理することが肝要、と述べている。

また、ワークシートの運用の形態として、利用者が一人でワークを行い完結することもあるが、それはごく一部の例であり、ワークシートの記入内容について回答をどう提示するか、エデュケーターら館のスタッ

フとどのように記入前・記入中・記入後のコミュニケーションを行うか、などの設計も重要である。一般利用者、学校団体に対して、来館の事前と事後も含めた、ワークシートの利用・フォローも含めた運用のかたちもありうることも、木下は指摘している（木下 2009: 130）。

そして、ワークシートの項目の設定として、開かれた質問（オープンエンド・クエスチョン）と、閉じられた質問（クローズド・クエスチョン）の両者をどのように効果的に設計するかが重要であり、それは先述の運用体制によるフォロー、連携が必要であることもポイントとして頻出するものである（木下・横山 2012: 84-85、木下 2009: 131-133）。ぬりえワークシートの事例でも、好きな見本を探してぬる、自分でオリジナルの柄や文様を想起してぬる、という場合はオープンエンドだが、ある見本について見本の通りできる限り正確に再現して文様や柄をぬろうと試みることも一種のクローズド・クエスチョンのかたちとも言えるのではないだろうか。このぬりえワークシートでは、オープンエンドとクローズドの両者それぞれから得られる効果があると想定しており、先述 2.3. のねらいの中にも併記されている。

また、ワークシートの想定対象として、設定対象層ごとにワークシートを設計する方法と、ひとつのワークシートで複数の体験者像を設定する方法がある。前者については、東（東 2018: 227-236）は、あるワークシートの対象を年齢層で 5 段階のレベルに分け、それぞれの目標と理想となるワークシートのタイプの組み合わせを提示している。一方、本稿のぬりえワークシートは後者であり、配布対象者を制限できない場合、もしくは多くのパターンを用意したとしても確実に対象想定層に配布できないことがあることをふまえ、ひとつのワークシートに複数の利用者像・体験者像を想定したうえで、体験内容、事前知識、take home message の内容を複数レベル想定している。

さらに、館の物理的な空間と人流のキャパシティ、ワークシートの記入や回答の場所があるかどうか、などの物理的要件も関わってくる。これらの物理要件は館でコントロールできる範囲とできない範囲があるため、現実的な運用の落としどころをどのように工夫するかもポイントとなる。

そしてこれらの要件を包含するように、ワークシートに伴う活動をひとつの教育普及プログラムとしてとらえたうえで、ワークシートの開発段階では内部スタッフの試行と利用者調査によるフィードバックと改善、チューニングが必要となる。村井は、ワークシートやセルフガイドを含めた各種のツール、プログラムの評価の重要性とその方法論を提示している（村井 2012: 160-165）。

筆者ら探究展示の担当チームは、ぬりえワークシートの開発も含めて、外部監修者の佐藤と議論を繰り返しながら開発を行った。同外部監修者とは当館の 2020 年度の調査研究プロジェクトとして、「展示室における展示体験深化のためのワークシート開発」について研究を実施しており [7]、そこでのレクチャーと議論も、間接的にぬりえワークシートの開発に反映されている。佐藤からは、ワークシートはただのツールではなく、時間軸も含む体験者にとってのワーク、プログラムであること、そこでは「デザインの条件」と「take home message」と「うながしたい行為」を組み込むことが必須とされることが強調された。そしてプログラムのデザイン要素として、コンセプト、活動（時間）、場（空間）、コミュニティ（人）、道具があり、その「道具」（＝ここではワークシート）の開発には、「経験、コミュニケーションをデザインすること」、「全ての行為の意味を検証すること」、「情報の階層化、取捨選択」、「居場所としての博物館」のノウハウの蓄積が必要なことが述べられた。これは本ぬりえワークシートのみではなく、共通する開発方法論のひとつとして今後の教育ツール開発にも適用できることであろう。

3.2. 要件の設計と検討

今回のぬりえワークシートに求められる役割として、先述したように館のオープンの PR ツールの機能を持ったうえで、持ち帰りツールの機能と現場（館内・館外）でのワークに両方に対応し、かつ既出 2.3. に記載したような多層的なねらいを満たすように、要件の設計を行った。

3.2.1 紙面の仕様

こども霞が関見学デーは 1 日に 3000 人以上の親子の来場があるイベントと聞いていた。そのため、数がそれなりに必要なこと、アイヌ文化の着物と文様の特徴と多様性を示すうえで、ぬりえの版が単一ではなく複数必要になること、開館後も継続して配布・使用していくこと、コスト

面で負荷を下げつつ内製も可能なものであること、などが求められた。持ち帰りの手軽さ、完成品を掲示するときのハンドリングのよさも含めて、A4判に面付けをして半分に裁断するA5判モノクロ片面の紙面仕様とした。

紙面構成としては、当然ながらぬりえ部分が主となるが、持ち帰りツールとして持つべき情報として、館がオープンする旨の文章とオープン日の文言、博物館ロゴマーク、体験行為の投げかけの多言語文言、着物以外のもうひとつの民具のぬりえ、体験者の名前の記入欄、使用資料のクレジットをA5判の中に収めるデザインとした（【図1】、【図3】）。

3.2.2　着物の選定と枚数

ぬりえワークシートで取り上げる着物は、着物の特徴とともに、文様の特徴がわかるものである必要がある。先述2.4.2の探究展示の「着物」ユニットでは、多種多様なかたち、素材、文様を示すため、アイヌ文化に関わる衣服を10種類に整理した。衣服（木綿）4種、衣服（樹皮）、衣服（草皮）、衣服（魚皮）、衣服（鳥皮）、衣服（獣皮）、小袖である。木綿衣の文様には大きく分けて3種類あり[8]、アットゥシの文様の作り方に似た木綿衣を含めて4種となっている。その中から、博物館収蔵資料から写真画像が使用できるもの、色や文様のバリエーションを見本として提示できるもの、また、文様構成が適度な複雑さを持ったもの、という視点で選定し、収蔵資料から木綿衣1点（カパラミㇷ゚）と樹皮衣1点（アットゥシ）を選定した。

着物には前面と背面があり、どちらの面にも文様が施されていることから、展示する際にもどちらの面を展示面に選ぶかの検討が毎回必要である。どちらの面も特徴があり、ぬりえワークシートにどの面を載せるかは難しい点であった。両面を載せるのがよいのであるが、ぬりえの版が際限なく増えてしまい運用の負荷も増えていくため、検討の結果、片方の衣装は前面を、もう片方の衣装は背面を載せることとし、この2種類のワークシートを併置することで、着物の前面と背面の両方に興味を持ってもらう意図とした。

3.2.3　柄があるものと柄がないもの

上記の着物の選定の検討のなかで、このぬりえワークシートが持つねらいを鑑みた際に、もとから文様の柄があるワークシートをぬっていくことと、ある程度着物や文様のイメージを持っている人が自分で無地から文様を構成していくような、複数のレベル設定が必要なのでは、という議論になった。全く見本がないなかでぬりえや線を描いていくことは一般の体験者には困難なことであるため、後述する見本集をワークシートとセットにして用意をしていたが、見本を見ながら描いたとしても、無地シートに文様を描いていくのは容易ではない。だが、本来着物に文様を施す際には、はじめは無地のまっさらな生地の状態から始めるものであり、また自由に自分でデザインを考えてぬりえを行うような使い方も尊重されるべきでは、という整理となった。そのため、柄があるもの2種類（木綿衣の前面と、樹皮衣の背面）、そして着物の外枠と前身頃の線だけが書かれた、無地の柄がないもの2種類（前面の枠と、背面の枠）の、計4種類を標準のセットとして用意することとなった。

また着物は種類やサイズによって、身頃の長さ・幅、袖の長さ・幅・形、襟の形状が異なるため、実際は「着物の外枠の線」はある着物の一例になってしまい、見本写真等と比べると全体のシルエットが異なることがあるが、版の種類をある程度抑える必要があるため、外枠の線は限られた事例のみの提示となった。実際に見本と見比べながらぬりえをぬる過程のなかで、体験者にもじり袖や筒袖などの袖の形状の違いなどを発見してもらうことができるならば、着物のデザインの多様性をより感じてもらえるのではないかとも考えている。それは同時に、ぬりえをぬるうえで必要となる資料や参考図書の見かたを深めていくことも意図している。

3.2.4　ぬりえ図版の制作と文様の監修

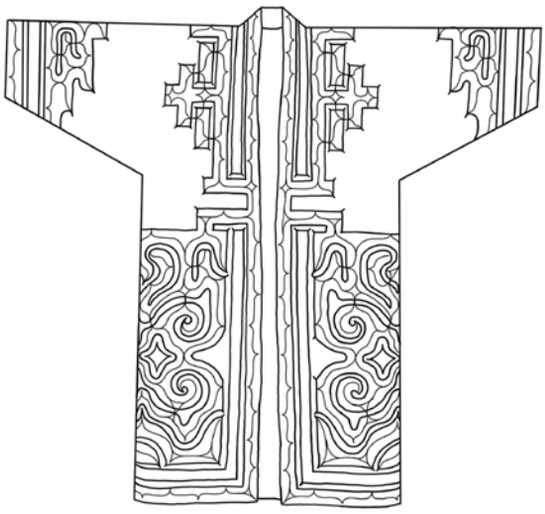
選定した着物の写真をもとにして、ぬりえの線画を描く作業について、単純に写真から文様を含む着物の全ての線を取り出そうとすると、線が非常に細かくなりすぎてしまうため、調整が必要となった。選定した木綿衣は、切り伏せの布に縫われた刺繍だけでなく、切り伏せの布の

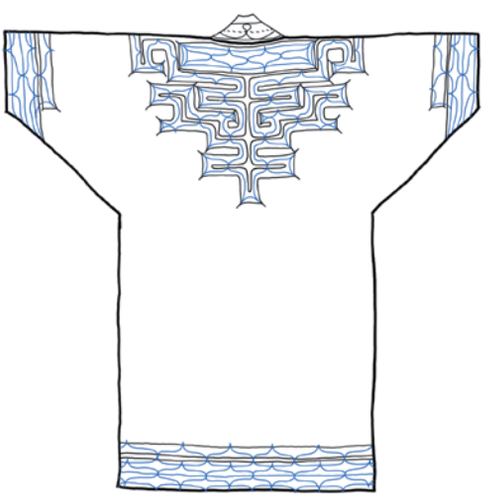
写真５　ぬりえワークシートの原案となった着物の写真
［上段：木綿衣、下段：樹皮衣］（2019 年 6 月 18 日、21 日 国立アイヌ民族博物館撮影）

種類が複数あり、細かい柄がもとからついている布が切り伏せされた部分も複数ある（【写真5】）。それらの細部の線の集まりをどこまで残すか、どこまで省くか、の調整が必要である。

また、文様についても全てを含めて線に変換すると情報量が多すぎてぬりえとしてのハードルが高くなりすぎる部分があった。アイヌ文化の文様は最小の構成単位が製法上あるため、その理解がないまま文様をトリミングしたりすることは、適切ではないアイヌ文様を表現・発信してしまう危険性がある。そのため着物と刺繍の伝承者である当館学芸員に監修と線画の案を複数検討してもらい、どこまでの文様の情報量を入れ込むか、文様の構成単位をどこまで線画で再現するかをともに検討した（【図 2】）。

また、刺繍で縫われている文様の部分を、ぬりえ上で線をどのように表現するか、についても検討が必要となった。具体的には、カパラミㇷﾟと呼ばれる木綿衣は貼り付ける布が白地のことが多いため、細い刺繍線をぬりつぶすことはないと思われるが、アットゥシ（樹皮衣）や、チヂリ、チカㇲカㇲペと呼ばれる木綿衣の多くは、切り伏せの布の色をぬると刺繍線がぬりつぶされることがあるので注意が必要となる。実際には刺繍も色がついているので色鉛筆で刺繍の線をぬることができるように、線を細くする案、点線





で描写する案などを検討し、選定した。

適切な文化表現のためのツールを作るためには、これらの伝承者との確認の工程は必須となる部分であり、当館では館内に学芸員・研究員に伝承者がいることが強みと特徴となっている。

3.2.5　着物以外のもうひとつのぬりえ

2.4.1 の探究展示「手しごと：文様」ユニットでも述べたように、文様は刺繍だけでなく、木彫、ござ編みなどの手法で作られるものでもある。そのため本ワークシートでは、あくまでメインのぬりえは着物であるが、小さく別の民具のぬりえも入れることとした。ここではマキリ（小刀）とタマサイ（首飾り）のイラストを入れ込んだが、線画に関する注意事項としては、着物と同様に文様の作り方や最小単位への配慮が必要である。マキリの文様の線がぬったときに見えなくな

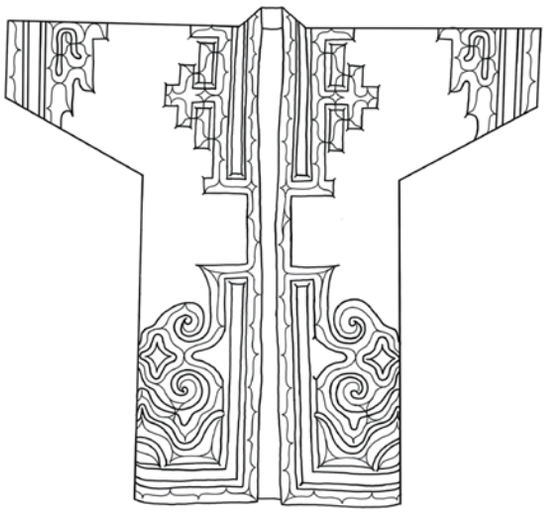


図２　文様の最小構成単位、線の量、太さの検討過程

らないように、線画、線の太さ、解像度の調整を行った。

3.2.6　体験行為の投げかけの文言（多言語）

ワークシートはあくまで体験をうながすためのツールであるので、このぬりえワークシートで体験者に行ってほしい行為の投げかけを、シンプルな文言で記載した。

当館はアイヌ語を第一言語としているので、最低でもアイヌ語、日本語、英語を同時表記すべきところであるが、A5 判の紙面の都合上、種類ごとに２カ国語（アイヌ語＋日本語／英語＋日本語）の組み合わせで文言を記載した。まず、日本語で「写真カードを見て、もようをかいて色をぬろう」という共通の文言を入れた。そのうえで、「ぬりえ」という単語もアイヌ語辞書にはない語であるため、アイヌ語専門の研究員に相談し、「この着物に色をぬってね」という意味のアイヌ語の文章「タン アミㇷ゚ イロ ウシ ヤン *tan amip iro usi yan*」を記載した。

また、ぬりえを設置するアクリルラックにも、「どうぞ（ぬりえの紙を）お持ちください」という意味のアイヌ語「タン カンピ エチコㇺ ヤッカ ピㇼカ *tan kampi eci=kor yakka pirka*」を記載し、アイヌ語、日本語、英語の３カ国語表記とした（【写真 6】）。「アイヌ語を使っていくこと」という「コト」も、ワークシートという「モノ」とともに持ち帰ってもらい思い起こしてもらう

写真 6　ぬりえワークシートの、館内での設置の様子（2021 年 10 月 28 日（左）、2021 年 6 月 19 日（右）筆者撮影）

ことを想定している。

3.2.7　筆記具の選定

ぬりえのワークということで、色をぬる筆記具についても、国内外の複数の色鉛筆などを入手し、適切な筆記具を検証した。特に文様部分や刺繍部分は細かいぬりが想定されるため、クレヨンなど柔らかめで塗り幅が大きくなるものは不向きであった。色鉛筆も比較してみると、芯の柔らかさ、発色、色のラインナップ、すなわちアイヌ文化の着物で見本写真に頻出するような色が揃っているか、などが異なり、試行を重ねて選定した。また、見学デー 2019 など、館外で行ったテストの際に、色鉛筆の減りの速さを参考に、どの色が一番使われているかについても、把握を試みた（【写真 7】）。

写真 7　色鉛筆の比較テストの様子（2019 年 7 月 16 日 筆者撮影）

3.2.8　ぬりえを行うための補助ツール

ぬりえシートと色鉛筆があれば、ぬりえができないことはないが、2.3. のねらいで想定した体験ができるような環境整備がもう少し必要である。【写真 8】は、補助ツール群の一覧である。

具体的には、まずはじめに、ぬりの見本となる写真集が必要となる。先述 2.4.2 の探究展示「着物」ユニットでピックアップしていた着物の資料写真に、木綿衣と樹皮衣の種類を増やしたもの、そして無地の柄にぬる際のバリエーションとして、樺太地域の草皮衣の写真も用意し、全 12 着の着物の前面・背面が入った写真のパウチを作成した。パウチのサイズ、形態についても、A3 サイズ、A4 サイズ、ハトメとリングで 12×12cm の単語カード状にしたもの、など、複数の形状を試作した。タマサイについての見本写真も、探究展示「タマサイ」ユニットでピックアップしていた資料写真から見本パウチを用意した。

また、着物や文様、刺繍の見本として、参考図書も必須である。一筆書きで刺繍を行う手順等の参考になるように、アイヌ衣装と文様の刺繍の書籍（津田 2014）を併置するとともに、アイヌ民族の服飾を取り扱った展覧会図録等をぬりえとともに複数配置した。

完成したぬりえは、本人判断で記名してもらい、会場に用意した掲示スペースに体験者自身が貼

図3　ぬりえワークシート［開館後版、A-1］

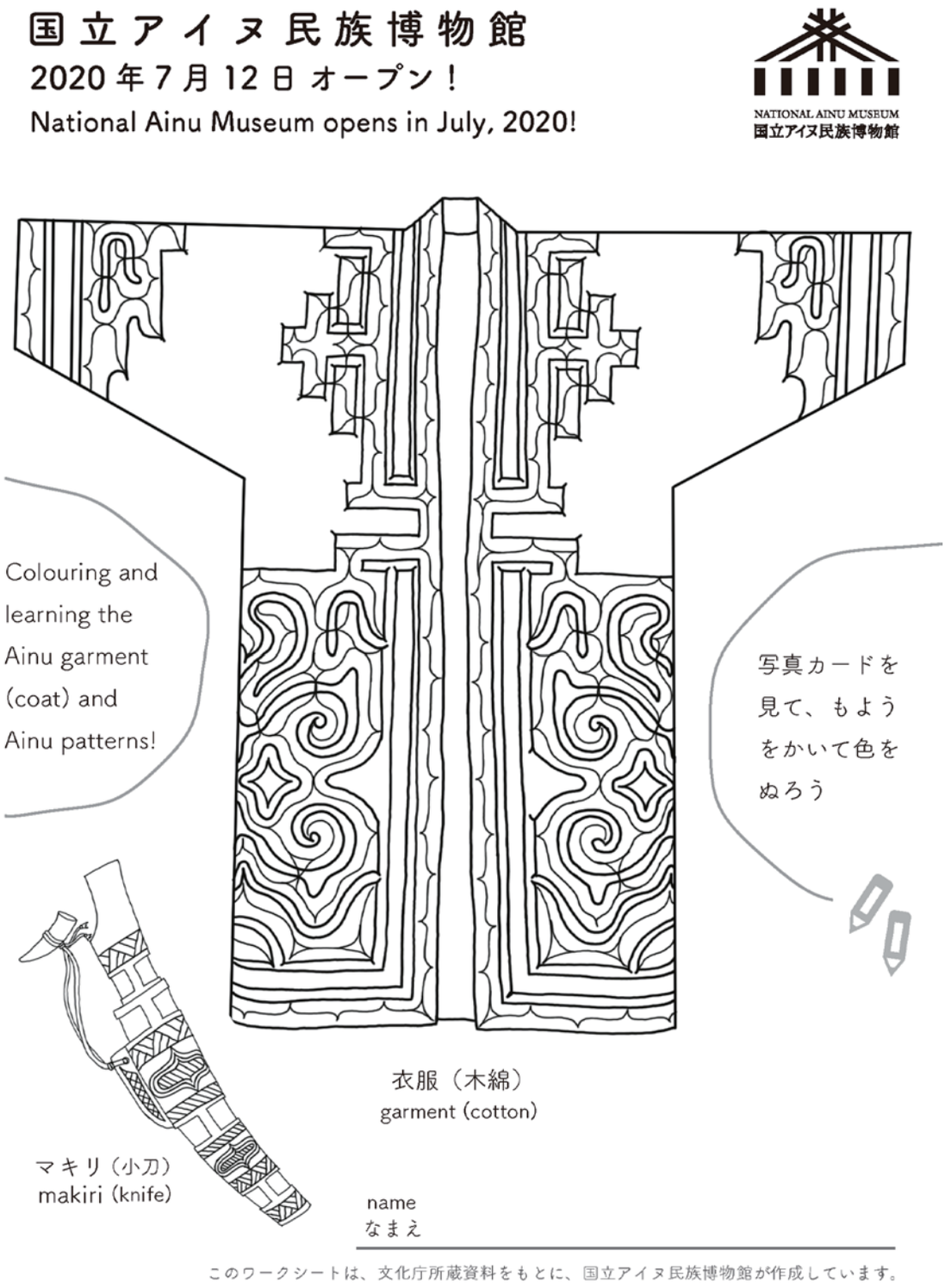


図3　ぬりえワークシート［開館後版、A-2］

図3　ぬりえワークシート［開館後版、B-1］

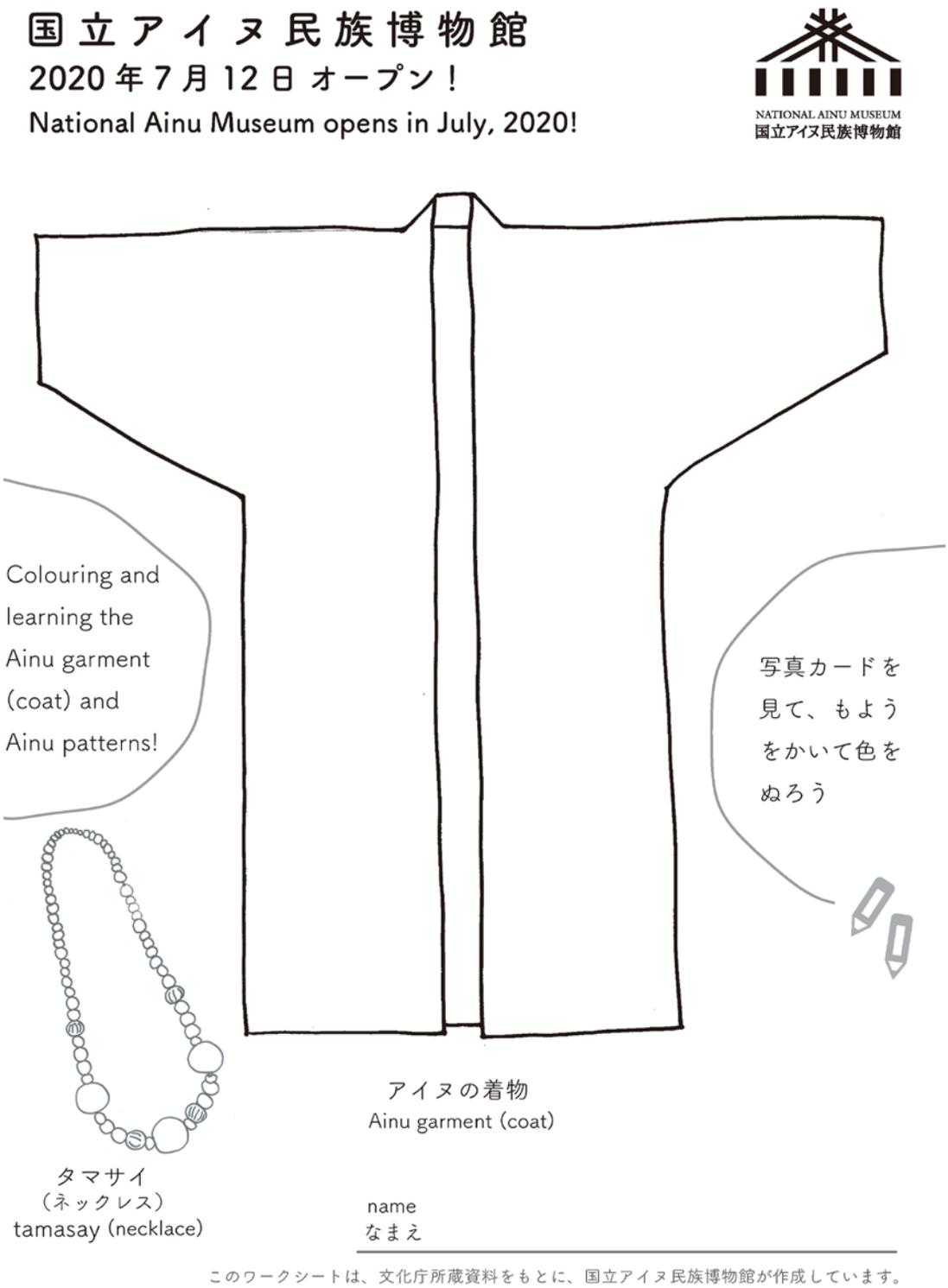


図3　ぬりえワークシート［開館後版、B-2］

写真8　ぬりえのための補助ツール群（2021年10月28日（左）、2019年12月21日（右）筆者撮影）

図4　解説パウチ「木綿衣の呼び方」

りだして作品が共有できるよう、自立壁面を各会場に用意していただいた。貼る際にはアイヌ文様が描かれたマスキングテープを複数種用意して貼ってもらった。このマスキングテープについても、伝承者のかたが監修した文様となっているものを選んで購入、使用している。

後述のこども霞が関見学デーの2021年度はオンラインでの開催となったが、オンラインでぬりえワークシートをダウンロードしてもらう際には、上記の見本写真等も併せてダウンロードできるように、使用許諾に配慮しながらpdfデータも作成している。

3.2.9　着物の名称の解説パウチ

アイヌ民族の着物の名称については、地域、製法、材料、技法等で様々な組み合わせによってアイヌ語の呼称があり、同じアイヌ語名称でも違う形態の衣服を指すこともしばしばある[9]。作られた地域、製作者がわかっており、その製作者が呼んでいるアイヌ語呼称がその衣服の最も適切な呼び方となると解釈されるが、非常に複雑であるため、解説のためのパウチを学芸員が作成し、名称の説明や質問があったときの解説用として用意した（【図4】）。しかし開館前後の基本展示の議論のなかで、現況では呼称については研究途上であること、広く誤解のない呼称を現時点では採用する、という館の方針で、着物のアイヌ語名称は表記せず、「衣服（木綿）」「衣服（樹皮）」という呼び方となっている。呼称の方針については今後も議論が必要な部分と考えるが、その方針に合わせているため、このパウチは現在積極的には使用していない。

4.　試行

4.1.　館外会場での試行

ぬりえワークシートの開館前の試行としては、ま

写真 9　見学デー 2019 での、ぬりえワークシート試行の様子 [10]
（2019 年 8 月 7 日、8 日、筆者撮影）

ず先述の見学デー 2019 で実施した。2019 年 8 月に 2 日間出展したが、会場全体で 1 日 3,500 人ほどの親子連れの来場者があったなかで、ぬりえワークシートも試行を行った（【写真 9】）。当方側の意図としては、先述の見本集等の補助ツール一式を用意したうえで、基本はぬりえをどのようにぬるかは体験者の自由とした。ぬりえの種類は 4 種類あることを伝え、柄があるものとないもののどちらを選ぶか、一人で何枚ぬるか、は運用状況を観ながらも、体験者の意向を尊重し自身で判断してもらうようにした。

また、会場の掲示スペースに貼るか、持ち帰るか、も基本は任意としたが、完成した作品をシェアしてお互い楽しんでもらうねらいも含めていたので、掲示スペースへの掲示を声がけしつつ試行運用した。掲示にぬりえ作品を貼ったうえで、スマートフォン等で写真を撮って帰る、という体験者も多く観られた。掲示コーナーに貼る際のアイヌ文様入りマスキングテープについても、用意した 7 種類から好きな色・柄を選んでもらい、自身で貼ってもらった（【写真 10】）。時

写真 10　道内の会場での試行の様子
（2019 年 12 月 7 日、2019 年 11 月 3 日、2019 年 11 月 3 日 筆者撮影）

間がない人には 4 枚セットでぬりえを渡し、自宅でぬることも可とした。

同様の試行会を、開館前の北海道内各地で行った開館 PR のプレ展示の巡回先のなかで、3 回実施した（函館市、比布町、札幌市）。各会場で掲示コーナーに張り出された作品は、終了後に回収、保管し、分析の資料とするとともに、探究展示 t.3 スペースの作品コーナーに入れ替わりで掲示している。

4.2.　館内研修での試行

ぬりえワークシートは館内外の利用者に体験してもらうものとして開発しているが、岩崎ら（岩崎・

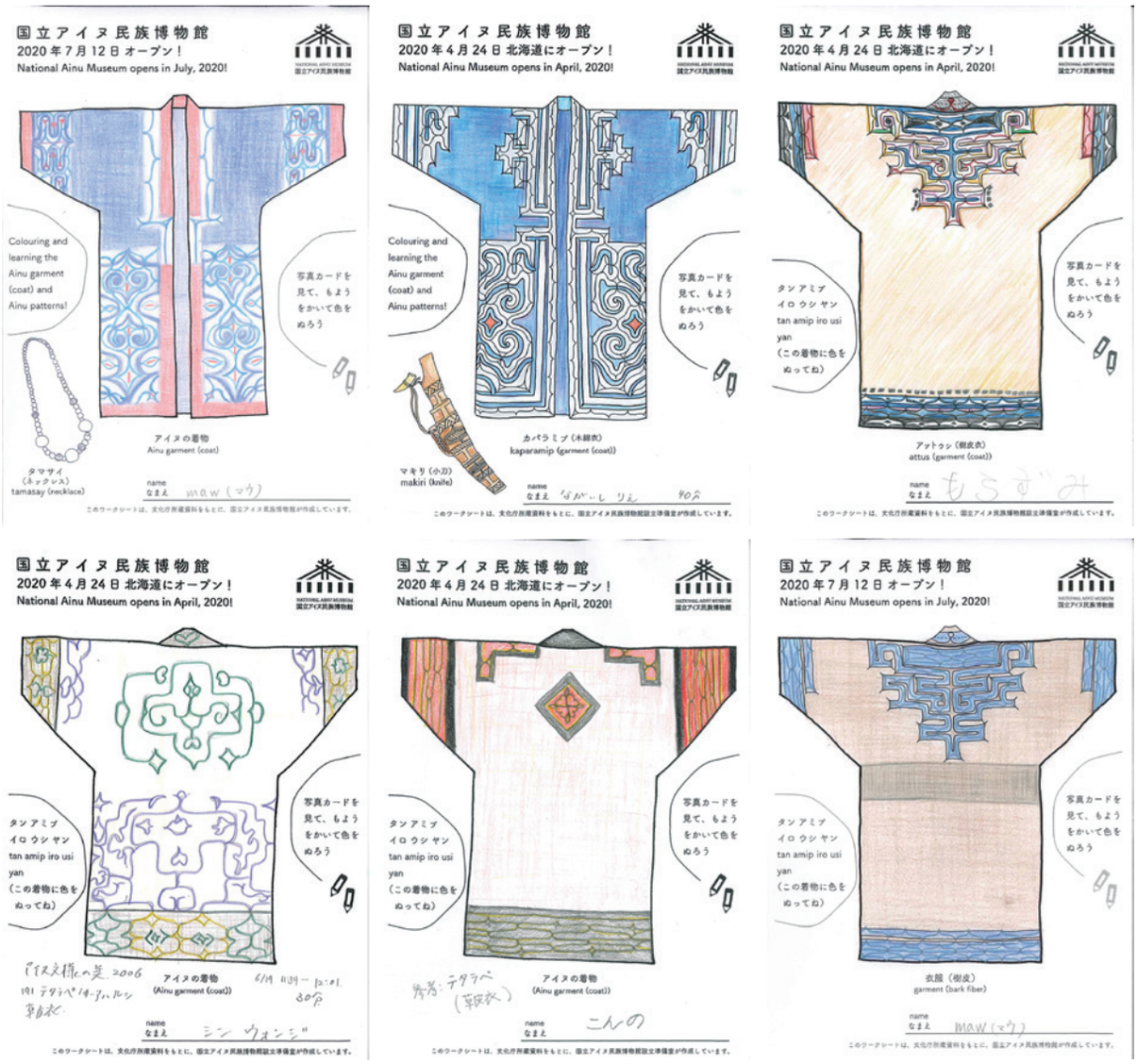


図5　館内スタッフの研修で試行したぬりえ作品

可児・寺島・半田 2013: 23）が、「まずは先生自身が実際にワークシートをやってみることをおすすめします。」と述べているように、実施する側、ワークシートを作成した側自身による試行も必要である。2020年の4月より、探究展示の全体概要や各ユニットについての研修を継続して行っていたが、その研修のなかで、当館エデュケーターやスタッフにもぬりえワークシートを試行してもらった。内部スタッフなので、ぬるのにかかった時間も記入してもらうようにして試行した。一般のかたよりはアイヌ文化への知識があり、着物や文様についてふれる機会や様々な例を見る機会が多い立場から試行を行った。細かくぬって完成させようとすると30分以上かかることもあるワークシートでもあり、実際に完成させるのにどれぐらいの時間と労力を必要とするか、に気づいてもらう目的もあった。概ね30分から50分ほどかかったスタッフが多かった。

これらスタッフの作品も、探究展示t.3スペースの作品コーナーに一部入れ替わりで掲示している（【図5】）。

4.3.　オンラインでの試行

新型コロナウィルス感染症の影響で、こども霞が関見学デーの2020年度は中止、2021年度はオンラインでの参加となった。その中で、後々のオンラインコンテンツの開発・拡充を想定したうえで、ぬりえワークシートをダウンロードして自宅でも体験できるかたちを2021年8月に2日間限定で試行した[11]。補助ツールとして、着物の見本写真集も併せてダウンロードできるように用意し、完成した作品をスキャンも

しくは撮影して博物館へ投稿できる手段（ファイル転送システムで受信する体制）を試行した（【図 6】）。2021 年度は周知方法等が限られ期間が短かったこともあり、実際のオンライン投稿は残念ながらなかったが、オンライン／オンサイトを問わずに実施できる体制を整える機会となった。

図 6　オンラインぬりえ体験の説明資料

5. 分析

5.1. 開館前の試行での傾向分析

開館前の 4 会場（霞が関、函館市、比布町、札幌市）で行ったぬりえワークシートの試行から傾向を分析した。各会場で開催時間、開催時期、来場者数、来場者層、会場のキャパシティなどが各々異なるため、定量的な分析ではなく、現場の観察と記録映像から見いだせる全体の傾向の提示とする。スタッフによる試行についても、傾向分析の補足として用いた。

参加者の傾向としては、親子連れの場合、子どもだけでなく保護者も一緒になって自分のぬりえを行う姿が多数観られた。また、大人一名での来場者がぬりえを熱心に体験していく事例も多く観られ、性別を問わず幅広い年代の体験が見受けられた。

また、体験時間についても年齢層を問わず、早くぬりえを終わらせてしまう人、ぬるよりは図書等参考文献をじっくり読む人などがいるが、一定程度の長い時間、30 分から 50 分程度をかけて、1 枚をじっくりぬる、もしくは複数のぬりえに挑戦する事例も幅広い年齢層で観ることができた。ある程度母数があれば、記録映像からもう少し詳細にぬりえ体験時間や一人で何枚ぬりえを行ったかを分析することもできたと思われるが、本稿ではこの傾向分析に留めておく。

次に、掲示コーナーに掲示されたぬりえの体験内容についてカテゴリー分けを行うと、大きく下記のような傾向が観られた（【図 7】）。先述の 3.1. でふれたように、このぬりえワークシートは、オープンエンド・クエスチョンとクローズエンド・クエスチョンの両方の性質を持った体験になっていると解釈できる。

a) 柄あり＋完全に見本を模写するタイプ
b) 柄あり＋見本、参考図書から探して参考にしたうえで、色等をアレンジするタイプ
c) 柄なし＋見本、参考図書から探して参考にして無地から描くタイプ
d) 柄なし＋完全にオリジナルでアイヌの着物・文様をイメージして描くタイプ
e) 柄なし＋アイヌ文化の文脈以外のものを自由に描く

また、スタッフ向けに行った研修でのぬりえの場合は、館内で行ったので、c' とも言える、

c') 柄なし＋展示室から着物を探して参考にして無地から描くタイプ

のぬりえ体験も複数観られた。

ぬりえ完成後にエデュケーターと体験者が対話を行うことができる場合、ぬりえの体験からどのような話題につなげていくかを考える際に、これらのぬりかたのタイプをもとに対話の想定・検討を行う材料になったと考えている。

5.2. 館内での利用状況

本来開館後は、探究展示 t.3 エリアにある丸テーブルで、靴をぬいで座りながらぬりえの体験を行い、t.3 の作品コーナーに相互に作品を貼りだしてコミュニケーションを誘発するよう設計を行っていた（2.2. の写真 2）。しかし、新型コロナウィルスの感染防止のため、探究展示 t.3 エリアは開館以来運用できておらず、残念ながらぬりえワークシートの配布に留まっている。

しかし、開館日から 2021 年 10 月 30 日の時点で、ぬりえワークシートは全体で 39,135 枚が来館者に

図７　ぬりえのぬりかたのタイプ別の例

よって持ち帰られている。柄ありと柄なしの比率としては、見た目の興味を引く部分と、アクリルラックの前面のほうに柄ありを置いていることから、柄ありが27,085枚（69.2%）、柄なしが12,050枚（30.8%）という比率となっている。おおよそ7:3の割合ではあるが、無地の柄なしワークシートをセットで持ち帰る人も一定数いると考えられる。１日あたりの枚数としては、季節や特別展の有無、学校団体等で入館者数の波があるが、１日平均としては92.1枚（柄あり63.7枚、柄なし28.4枚）[12] となっている。持ち帰られた後のアクティビティについての追跡調査はできていないが、一定数規模の来館者が持ち帰る教育ツールとして定着しつつある。また、学校で作られた教育旅行のしおりの１ページに、ぬりえワークシートを掲載している事例もあった。

6. 発展と結び

コロナ禍の影響もあり、現況で開発と評価、分析について言えることは以上の内容となり、ここから先は実際のぬりえワークシートの館内外での稼働が必要となるが、終章として、ぬりえワークシートからつながる基本展示室内の連携と、今後の発展についての構想を述べる。

6.1. 探究展示のユニット、プラザ展示、6テーマ展示との連携

館外利用のほかに、館内基本展示室に標準で設置、運用することを想定していたぬりえワークシートであるため、ぬりえの完成前後で基本展示室内でどのようにアクティビティとアイヌ文化への理解の深化につなげていくかを、下記のように整理している。

2.4. で述べた、探究展示のユニット 2 点「手しごと：文様」と「着物」との連携として、ぬりえをある程度の密度で完成させた体験者は、柄があるぬりえであれば、すでに柄が描かれた上をぬる、刺繍をたどることだけでも、相応の細かく神経を使う作業であることは感じ取れると思われる。柄がないぬりえを体験した人は、無地の着物の前面・背面のキャンバスを前に、どのような手段で繊細かつ系統だった、かつところどころで作り手のアレンジの入った文様を構成していくか、という圧を大小感じられるのではないか。またぬりえワークシートは A5 判で小さいサイズであるが、それをぬるのに 30 分以上かかるとしたときに、「着物」ユニットにある、約 5 分の 1 サイズの実物資料のミニ衣装に施された細密な刺繍を行うのにどれぐらいの時間がかかるのか、さらに実際の人間の大きさである着物に文様を施していくことが、どれぐらい大きな規模の制作になるのか、について、少しでも思いをはせることができるのではないかと考えている。

また、基本展示のプラザ展示と、6 テーマ展示の「ウレシパ 私たちのくらし」では、様々な種類の着物が展示されており、「すごいきれいで細かい文様の着物だ」という感想だけでなく、その驚きをもとに、自分の手を動かしてぬりえを行ったからこそ、実物資料をよりじっくりと深く観察し、各々の感想・発想につなげていくのではないか。例えば、「きれいな文様だが、これだけ大きい範囲に文様を作っていくのは一体何日ぐらいかかるのだろう」、「範囲が広いがどうやって文様の位置やかたちを決めていくのだろう」、「刺繍の長さもすごい量になるが、これだけ手で均一に刺繍を縫い続けていくことができるだろうか」などである。そして刺繍の実際の縫い方、文様の設計についての意識を持ったうえで、探究展示「手しごと：文様」のユニットに行くと、5 枚めくりで刺繍の縫い方をたどる展示物があり（【写真 11】）、グリッドや一筆書きの手順を見ることができる。また、となりにある木彫の彫り文様の見本、花ござの編みの文様の見本を見つけることで（2.4.1 の写真 3）、それぞれのほかの文様技法への興味へとつないでいくルートも想定して、探究展示とぬりえワークシートを設計している。

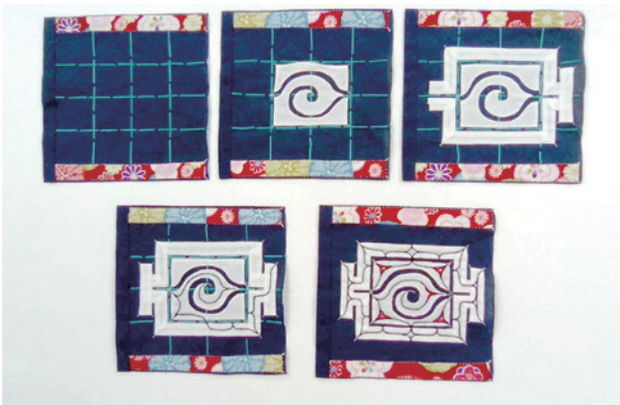


写真 11　探究展示「手しごと：文様」のユニットの、刺繍の手順の解説展示。当館学芸員による制作。（2020 年 2 月 26 日 筆者撮影）

このように、このぬりえワークシートは単なるぬりえではなく、様々な行為への可能性を開いている教育ツールである。「なぜぬるのか」には理由があり、その理由として、観察とぬる行為が上述の「理解の深化」につながることである、と考えている。

6.2. 館内外の博物館利用者に向けて

4.3. のこども霞が関見学デー 2021 のところでも述べたように、ぬりえワークシートのオンラインコンテンツとしての対応も今後必要な展開となる。投稿受け入れ、シェアの仕組みなどは、ぬりえだけでなく、他のワークシートやプログラム開発にも共通する内容であり、コロナ禍の収束有無にかかわらず、展示室とオンラインのハイブリッドな対応ができる教育普及ツールとプログラムへの展開につなげていきたい。それはひいては、「博物館の利用者＝来館者のみ」とは限らなくなってきている昨今において、来館者と非来館者の両方に対応できるアクティビティとなりえるものである。

展示とワークシートを密接に連携させた設計のもと、ワークシートをフックとした、基本展示室とのつながりを見せるアクティビティとして展開、応用することを見据えて、今後も教育ツールを開発していきたい。

コロナ禍の影響が薄れ、手指消毒や色鉛筆等の消毒等の運用手段が解決され、探究展示 t.3 エリアが開かれたときに、本来想定していたぬりえワークシートを軸とした体験がもたらされることを期待し、また本稿で述べた開発のねらいや意図が達成されたかどうかの

プログラム評価、検証を行っていきたい。

謝辞

本稿は、国立アイヌ民族博物館2020年度調査研究プロジェクト個別研究B10「国立アイヌ民族博物館基本展示室における展示体験深化のための、ワークシート開発機能の研究」の内容をもとに一部を構成している。

同調査研究プロジェクトならびに当ワークシート開発について議論の時間とアドバイスをいただいた、展示ワーキング委員、探究展示監修者、文化庁ミュージアム・エデュケーション研修企画委員でもある、東京大学情報学環客員研究員の佐藤優香にお礼を申し上げる。

ぬりえワークシートの開発には、当館準備室時代からの各専門分野の学芸員、研究員の協力があり開発が可能となっている。改めて各員に謝意を表する。

また、館外の各会場でプレ展示イベントを主催していただき、ツールの試行の機会をいただけた各館主催者のかたがたと、試行にご協力いただいた体験者のかたがたに改めて謝意を表する。(敬称略)

注

1) ハード面:館の器となり空間を構成する建築物・展示室・展示ケースなど。ソフト面:伝達情報を構成する実物資料・解説グラフィック・模型・映像など。(齊藤 2019: 254-255)

2) ワークショップ開発の方法論の概論としては、(木下 2009)、(木下・横山 2012)、(佐藤 2019) などがある。

3) 2020年からの科研基盤C (北村 20K01134)「実施者の経験を起点とした博物館でのワークショップ評価指標と手法開発」にて、その議論も取り上げられると思われる。

4) 当館の設立経緯、ミッション、設立目的については、下記webサイトにまとめられている。
・文化庁webサイト「アイヌ文化の振興等」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/ainu/ (2020年10月29日閲覧)
・国立アイヌ民族博物館webサイト「博物館について:館長からのご挨拶」https://nam.go.jp/about/ (2020年10月29日閲覧)

5) 2021年10月時点では、映像モニタを映像のタッチ選択再生ではなく、ループ上映にすることで一部映像は上映を行っている。

6) 当初の開館予定日は2020年4月24日だったが、新型コロナウィルス感染症の影響で開館延期となり、実際の開館日は2020年7月12日である。ぬりえワークシートの記載も改版時に更新している。

7) 国立アイヌ民族博物館2020年度調査研究プロジェクト個別研究B10「国立アイヌ民族博物館基本展示室における展示体験深化のための、ワークシート開発機能の研究」を2020年度下期に行い、佐藤からのレクチャー、議論を行いながら、ワークシートのプロトタイプとして、「テーマに焦点を合わせたもの」、「展示室全体を回り館のミッションにふれるもの」、「オンラインで自宅で印刷して体験するもの」などを試作した。

8) 1) テープ状に裂いた布の端を折って縫い、その上に刺繍を施したもの。2) 布を模様の形に切り抜きその端を折って縫い、その上に刺繍を施したもの。 3) 刺繍のみを施したもの。このほかにも模様を組み合わせたものがある。模様も呼び方も地域差や個人差がある。(国立アイヌ民族博物館基本展示室のプラザ展示ケース6の解説より)

9) 北原の論考を参照。北原次郎太「《シンリッウレシパ(祖先の暮らし)14》アイヌの衣服文化(1) 木綿衣の呼び名」『月刊シロロ』2016.6 https://ainugo.nam.go.jp/siror/monthly/201606.html#01 (2020年10月29日閲覧)

10) ぬりえワークシートの名前欄は、記入は任意であり、かつ各会場での掲示コーナーへの掲示を前提とした記名となるように試行運用していたため、ぬりえ体験者本人の公開への同意は取れており、かつ個人を識別できない情報として取り扱っている。だが、本稿がオンライン上で公開されいつでも閲覧可能になることを想定したうえで、名前欄がフルネームで記載されている場合は、念のため名前の一部を匿名化する処理を行って写真を掲載するものとする。

11) 2021年8月に行った、こども霞が関見学デー2021以降、2021年10月31日時点では、基本展示室でのぬりえワークシート配布は行っているが、博物館webサイトからのワークシートのダウンロードと、完成品の投稿受け付けは実施していない。
・博物館webサイト「「こども霞が関見学デー」オンラインプログラムを実施します」
https://nam.go.jp/2021/08/16/kasumigasekiday2021online/ (2020年10月29日閲覧)

12) 緊急事態宣言による二度の臨時休館期間中の日数を除き、かつ通常の休館日を含む日数で計算した数値。平日と土日祝の両者を含めて計算。

参考文献

東俊佑 2018「北海道博物館におけるワークシートの開発と学校利用」『北海道博物館研究紀要』3: pp.219-252。

Falk, John H. and Dierking, Lynn D. 1996『博物館体験—学芸員のための視点—』高橋順一訳、東京:雄山閣。

岩崎誠司、可児光生、寺島洋子、半田昌之 2013「ミュージアムってどんなところ?」公益財団法人日本博物館協会編『子どもとミュージアム 学校で使えるミュージアム活用ガイド』pp.14-31、東京:ぎょうせい。

木下周一 2009『ミュージアムの学びをデザインする 展示グラフィック&学習ツール制作読本』東京:ぎょうせい。

木下周一、横山千晶 2012「ワークシートなどの教材作成法」小笠原喜康、並木美砂子、矢島國雄編『博物館教育論 新しい博物館教育を描きだす』pp.82-89、東京:ぎょうせい。

国立アイヌ民族博物館設立準備室 2020「国立アイヌ民族博物館の展示概要について」文化庁文化財部監修『月刊文化財』、令和2年4月号(679号):pp.10-17、東京:第一法規出版。

公益財団法人日本博物館協会編 2013「学校で使えるミュージアム一覧」公益財団法人日本博物館協会編『子どもとミュージアム 学校で使えるミュージアム活用ガイド』pp.106-145、東京:ぎょうせい。

村井良子 2012「博物館教育プログラムの評価」小笠原喜康、並木美砂子、矢島國雄編『博物館教育論 新しい博物館教育を描きだす』pp.158-169、東京:ぎょうせい。

齊藤克己 2019「展示のコンポーネント(構成要素)」日本展示学会編『展示学事典』pp.254-255、東京:丸善出版。

SASAKI, Kazuyoshi; OKUYAMA, Hideto; OSHINO, Akemi and SATO, Yuka 2019 Challenge for Development of the Interactive Exhibits for National Ainu Museum, poster presentation, ICOM CECA (International Councils of Museums International Committee for Education and Cultural Action) Conference, Kyoto, Japan.

笹木一義 2021「多民族共生に向けて博物館ができること—国立アイヌ民族博物館の開館とその社会的役割—」小川義和・五月女賢司編『発信する博物館 持続可能な社会に向けて』pp.94-

117、東京：ジダイ社。
SASAKI, Kazuyoshi; OKUYAMA, Hideto; OSHINO, Akemi and SATO, Yuka 2021 Co-creation between the National Ainu Museum and source communities in developing the educational role of museums focusing on indigenous culture, theme paper presentation, ICOM CECA (International Councils of Museums International Committee for Education and Cultural Action) Conference, Leuven, Belgium.
佐藤優香 2019「展示解説ツール」日本展示学会編『展示学事典』pp.394-395、東京：丸善出版。
津田命子 2014『伝統のアイヌ文様構成法によるアイヌ衣装と刺繍入門』ミニサイズ・チヂリ編、私家版。